

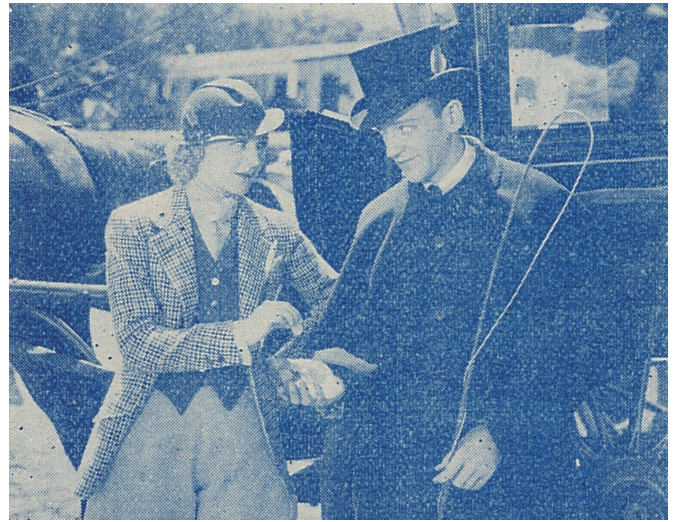
## 連載 36 『TOP HAT』 ミュージカルの多幸感

前回とりあげた『ショウ・ボート』（1936年）のハイブリッドな世界と比べるなら、『TOP HAT』（1935年）の世界は、まったく「白い」ミュージカルである。

トップハットとは円筒状のクラウンが高く上部が平らになった男性の帽子、とくに絹製であればシルクハットと呼ばれる。フレッド・アステア（1899－1987）のミュージカルにも、宝塚レビューの男役にも欠かせないアイテムだ。『TOP HAT』はフレッド・アステアがアメリカから公演のためにロンドンを訪れたミュージカルスターを演じ、ジンジャー・ロジャース（1911－1995）と恋に落ちるといふ物語だから、映画内のステージ（メタフィクション）もふんだんにあり、いたるところにトップハットのダンサーたち、紳士たちが登場する。アステアとロジャースはミュージカル史上のゴールデンコンビだった。

ミュージカルにおけるダンスの要素を重視するドゥルーズはトーキーの時代ミュージカルジャンルの確立に道を開いたのは「フレッド・アステアの——任意の場所で、たとえば、通りで、何台もの車に囲まれて、歩道に沿って練り広げられる——「アクション・ダンス」である」（『シネマ1 運動イメージ』法政大学出版局、2008年）とし、さらにその先駆けとしてチャップリンのパントマイムを視野に入れた。2016年のヒット・ミュージカル『ラ・ラ・ランド』にアステアへのオマージュが指摘されるのもそんなところである。

いつでもどこでもとつぜん歌い出す、ではなくて、とつぜん踊り出す、深夜のホテルの寝室でも。それで、階下の部屋で眠れなくなって苦情を訴えるロ



ジンジャー・ロジャースとフレッド・アステア  
（『キネマ旬報』1935年12月1日号所載）

ジャースと遭遇し、恋に落ちる。ロマンス自体は他愛もないが、ダンスは目を奪う。

「手と脚の自由奔放な運動、ときにステッキなどの小道具を活かし、またはヘジテーションに似たスリ足のステップを用ひて、元来がタップから源を發した彼の踊りに驚くべきヴァリエーションを持たしたのである」（『キネマ旬報』1935年12月1日）と飯田心美は感嘆した。主題歌 Top Hat は映画のなかのステージで踊られ、飯田は、「男ばかりの変つた味のもの」と述べたが、現代の宝塚レビューの男役群舞のなかにその伝統は生きている。岸松雄はこの場面の「白と黒との幾何学的な構成」（『キネマ旬報』1936年2月1日）にも注目した。そのほかに、男装の麗人とまではいかないが乗馬服姿のジンジャー・ロジャースと、アステアが驟雨のなかで踊るシーンなど、見どころは多い。

「アステアの身体は、幼少の頃からバレエで鍛えた動きのせい、それともその華奢な体つきと細い顔、なでつけたブロンドの髪のせい、洗練、繊細、気取りといったイメージを想起させる。」（「男らしさの表象：ヴィクトリア朝の身体とアメリカニズムの身体——フレッド・アステアとジーン・ケリー」『映画学』14号、2000年）と笹川慶子氏は論じている。笹川氏によれば、「19世紀末から1930－40年代にかけてアメリカ社会は、マスキュリン化が進み、ヴィクトリア朝の文明化された「男らしさ」は古いイデオロギーとなり



フレッド・アステアのステップ

「めめしい」男性性として否定される」にいたったという。その意味でフレッド・アステアは、空前にして絶後の、奇跡の男性ダンサーであることを運命づけられた存在であった。